

氏名	伊藤 順二
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第196号
学位授与の日付	平成14年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科歴史文化学専攻
学位論文題目	世紀転換期グルジアの農民運動

論文調査委員 (主査) 教授 谷川 稔 教授 南川 高志 助教授 小山 哲

論文内容の要旨

本論文は、世紀転換期の帝政ロシア領グルジアにおける民衆運動を、急進的知識人との関係を主眼として、言説分析などの手法を併用しつつ、政治社会史的に考察したものである。主要対象地域は西グルジアだが、アルメニア人問題やアゼルバイジャンの石油都市バクーの民族紛争なども考察されており、ほぼザカフカス（トランスコーカサス）全域の民族状況を視野に入れた、スケールの大きな議論が展開されている。

「はじめに」では、論者がグルジアに注目した理由が示される。グルジアは、後にメンシェヴィキとなる急進勢力が、民族主義的勢力を抑えて政権を握ったという点で、帝政ロシア領の少数民族地域のなかでも特異な地位を占めている。このヘゲモニー状況にたいする説明として、政治的支配者たるロシア人官僚や経済的支配者たるアルメニア人に対して劣位におかれたグルジア人の民族的利害が、マルクス主義的主張（階級利害）に吸収された、という議論が通説化しているという。しかし論者によれば、こうした図式を掲げる研究者（シュニーなど）は東グルジアに位置する首都チフリス（現トビリシ）のみを分析対象としており、メンシェヴィキの拠点となった西グルジア農民運動の実情は考慮の外におかれている。そもそも「グルジア人」を一括りで論じてよいのかという疑問も存在する。

そこで本稿では、まず西グルジア、わけてもグリアに照準を合わせ、現地語の新聞や回想録などの一次史料を駆使して具体的な事例を発掘しながら、この地の農民運動と急進的知識人や義賊の伝統との節合関係、すなわち運動構造が明らかにされる。さらに、グリア南方アチャラ（アジャリア）の港バトゥミで展開された急進的労働運動に目を転じ、その担い手であった「グリア人出稼ぎ労働者」の意識と紐帯が分析される。かれらが帰村後、グリア農民運動の主力となったからである。これらに加えて、民族的・宗教的区分と労働者内の階層区分とが複雑に絡み合う事例として、バクー民族紛争の分析が挿入されている。ザカフカス全域にわたって民族・宗教・階級の諸利害が重層的に絡み合う問題状況をより鮮明にしようという試みであろう。

以下、各章の内容を要約する。

第1章では地域の概要が紹介されている。黒海とカスピ海のあいだに位置するザカフカスが、ロシアとイスラム諸国の狭間にあって、多様な民族や宗教の交錯する地域だったことが確認される。

第2章「農村知識人とマルクス主義」では、グルジア語週刊紙『轍』および『旅人』を主な史料として、急進的知識人の農村への浸透が論じられている。これらの週刊紙の編集権は「マルクス主義サークル」の成員が掌握しており、かれらは紙面を通じて急進的イデオロギーを合法的に宣伝しえた。論者は、『轍』がもともと教育者向けの新聞だったことに着目し、都市の急進的知識人が『轍』を通じて農村知識人の間にも支持者を獲得し、急進的主張が啓蒙的主張と並んで農村に持ち込まれたとする。また、その紙面では、1902年以降農民運動の中心地となるグリア地方が、以前から「啓蒙活動の先進地域」として称揚されていた。農民運動と農村自治も、実態はともかく、紙面では啓蒙活動の成果の一つとして宣伝されたという。すなわち、第1に、グリアにおける農民運動の背後には農村知識人の活発な活動があった。第2に、グリアの農民運動の報

道は、他地域の農民や知識人に対して、急進勢力の指導下に隆盛する農民運動、というイメージを提供した。これらがメンシェヴィキによるヘゲモニーの主要な契機となった、と結論されている。

第3章「義賊伝説と義賊現象」では、義賊と農民運動との関係が考察される。前章でも言及されているが、農村自治によってもたらされた最大の成果は、治安の改善だったという。治安改善の契機として、村に在住する名を知られた盗賊の自宅を村民が襲撃し、改悛させ、農村自治に帰順させる、という「泥棒狩り」運動があったが、この運動は従来の研究史上ではほぼ無視されていた、と論者は主張する。

論者によれば、襲撃対象となった「泥棒」は、実質的には義賊的存在であった。「義賊」はホブズボームの主張するように、グルジアでも歴史的に多様な現象を包摂する概念である。農民運動の高揚の過程で、義賊的な行動様式は急進的知識人の非合法活動と節合された。「泥棒狩り」は、運動に非協力的だった義賊的権威までもが農民運動に従属し統合されたことを示す活動である。論者はこれを、村落の社会的権威の再配分とも位置付けている。

運動上層部は「自然発生的」テロルを公式には否定しており、組織的に統制された違法活動と義賊の活動（未統制の暴力行使）を峻別しようとしていたという。言説の上で、知識人は「義賊」なる単語を忌避し、組織の統制に服する存在という意味で「テロリスト」という語を多用していることが示されている。しかし実際上は、「テロリスト」は半ば独断で行動する義賊的存在であり、農民運動の行使する暴力の担い手として運動に寄与した、と論者は結論している。

第4章「バクーの民族衝突」では、ザカフカス全域に影響を及ぼすこととなった、1905年のバクーにおけるアルメニア人（アルメニア教会派キリスト教徒）とムスリムとの紛争が考察されている。この民族紛争の原因として、政府の煽動を強調することが通説化しているが、実際には2度目の衝突では、政府はむしろ紛争の鎮静化に努めていたという。

論者は、労働運動が民族・宗教問題と密接に関連していたことを詳述する。1904年12月の労働団体協約を一つの頂点とするバクーの労働運動は、キリスト教徒が多数を占める熟練労働者主体のものであり、その成果はムスリムの不熟練労働者に必ずしも恩恵をもたらすものではなかった。1905年2月以降の労働運動の事件史的考察から、運動組織の対立が、キリスト教徒とムスリム、熟練労働者と不熟練労働者という亀裂に照応していたことが明らかにされる。アルメニア人には熟練労働者が多く、強力な民族主義組織をも擁しており、「カフカスのユダヤ人」と言われていた。彼らがムスリム労働者の不満のスケープゴートにされたという。

第5章「石油積出都市バトゥミ」では、アチャラ地方の港湾都市バトゥミにおける労働運動と民族問題との連関が考察されている。「アチャラ人」は言語的にはグルジア語を話す、宗教的にはイスラム教徒であり、バトゥミの出稼ぎ労働者の主流をなす正教徒のグリア人労働者とは構成を異にしている。

バトゥミでは1902年3月のゼネストを契機として急進的労働運動が展開した。このゼネスト後に帰村した労働者は農民運動の発案者となっている。ゼネスト後ロシア社会民主労働党バトゥミ委員会は独裁的とも形容される権威を誇ったが、論者によれば、委員会を支えたのはグリア人の結束と、義賊的暴力行使だった。

委員会は「グルジア人の組織」として他民族から警戒されている。しかし論者は、メグレリ人（「グルジア人」の下位区分）や「ムスリムのグルジア人」（アチャラ人）もバトゥミ委員会の活動と対立していることを重視し、委員会と重ね合わされたのはグルジア人ではなく、「グリア人」（「グルジア人」の下位区分）の利害だったと結論している。また、バトゥミではムスリムのアチャラ人と正教徒グルジア人の間に衝突の危機が生じるが、それは最終的には義賊的権威と階級連帯のレトリックのもとで回避されたという。シューニー等の通説は、「グルジア人」という集合的単位を安易に一般化している、というのが、論者の通説批判の主要な論点である。

論文審査の結果の要旨

本論文が対象とするグルジアは、黒海とカスピ海に挟まれたザカフカス地方の中・西部に位置し、北はロシアとチェチェン、東はアゼルバイジャン、南はトルコ、アルメニアと境を接する地域である。ソ連邦崩壊以後独立した国内には、アプハジア、アジャリア自治共和国と南オセチア自治州をかかえ、宗教的にも、ロシア正教とアルメニア教会系キリスト教およびイスラム教が混在し、民族紛争の火種が今も燻り続けている。論者が照準を定めた世紀転換期の帝政ロシア下にあっても、この地域は同様のエスニック・コンフリクトが錯綜する舞台であった。

しかしながら、他方で同時代のグルジアでは、のちにメンシェヴィキと呼ばれるマルクス主義知識人が農民運動と結合して政治的ヘゲモニーを掌握していた。かれらはロシア革命後も赤軍の侵攻に屈する1921年まで政権政党の座にあった。これらの事実は、当地がスターリンの出身地であることや、今日の共和国大統領に元ソ連外相シュワルナゼを戴いていることとならんで、グルジア史に独特の色彩を与えている。

論者は、この特質に改めて着目し、民族利害が錯綜する地に在って、民族横断的な「階級利害」を強調するメンシェヴィキが、なぜ、どのようにしてヘゲモニーを掌握できたのかという、一見古典的な視角から立論していく。すなわち、「帝政ロシア下の少数民族問題」という、昨今欧米系の地域研究によくあるステロタイプからひとまず距離をとり、オーソドックスな社会運動史的分析をふまえたうえで、あらためて民族・宗教問題をも逆照射しようとする。しかも、綿密な実証だけでなく、言説分析の手法も随所に織り交ぜながら議論を進めていく。この独特のスタンスが本論文の基本的な特徴といえよう。たとえば、メンシェヴィキのヘゲモニーについては、アメリカのシュニーらの通説によると、グルジア人は政治的にはロシア人、経済的にはアルメニア人に従属していたが、かれらの民族的不満（民族利害）は急進的知識人のマルクス主義的主張（階級利害）にうまく吸収されたのだという。論者はこの通説を過度の単純化だと批判する。この図式は東グルジアに位置する首都チフリスの状況には妥当するかもしれないが、メンシェヴィキのヘゲモニーの源泉とされる西グルジア農村では、グルジア人の人口比率が高く、民族内部の対立も顕在化しており、そのままでは適用できないと説く。また、工場労働者を変革主体とみなすイデオロギーが、農民運動と結合したのは政治的アプロプリアション（読み替え）の一種だとも形容してみせる。論者はこの主張をさらに敷衍して、そもそも「グルジア人」を民族として一括りで論じられるのか、という疑問に誘っていく。

こうして本論文は、まず西グルジアに、わけても農民反乱の地グリアに照準を合わせ、現地語の新聞や回想録などの一次史料を駆使して具体的事例を発掘しながら、運動構造をあぶり出してゆく。農村知識人の啓蒙活動が当地の農民運動に果たした役割、宗教的秘儀の結社運動への取込み、義賊的伝統が「農村自治」に包摂されていく過程などが次々と明らかにされる。論者はさらに、グリアの南方、アジャリアの港湾都市バトゥミの労働運動に目を転じ、その担い手であった「グリア人出稼ぎ労働者」の意識と紐帯を考察する。かれらが帰村後、グリア農民運動の主力となったからであるが、同時に、当地がロシア人・アルメニア人・グルジア人（グリア人）からなる多民族都市であったこと、周辺農村ではグルジア語を話すムスリムが多数を占めていたことなどの意味も併せて分析されている。このあたり、グルジア語、ロシア語をはじめとする膨大な史料収集に裏打ちされた博引傍証は、見事という他ない。この語学力と史料レヴェルの高さは、本論文の最大の長所と言ってよい。

西グルジアの農民運動の構造分析としては、以上でひとつのまとまりを見せているのだが、論者はさらに視野をグルジアの東、カスピ海に面したアゼルバイジャンの港湾都市バクーで起こった民族紛争（労働争議）にまで拡大している。1905年当地で起きた2次にわたるムスリムとアルメニア人の衝突は、「民族の宿命的対立」と見なされてきた。しかしこの民族紛争の背景には、ムスリムが多数を占める不熟練労働者とアルメニア人熟練労働者という、労働者階層間の対立が看取されるという。民族的・宗教的区分と労働者の階層区分とが複雑に重なり合う事例として注目される。近い将来、ザカフカス全域を見通して、民族・宗教・階級の諸利害が重層的に絡み合う問題状況を掘り下げていこうとする論者の意欲がよく伝わってくる部分である。こうした視野の広さと多元的視角が本論の第3の特質と言えよう。

このように、本論文は、確かな語学力にもとづいた実証的手続きの綿密さ、多元的な分析視角の鋭さにおいて、水準を越えたものに仕上がっている。グルジア語を駆使できるわが国でのパイオニアとしてはもとより、国際的にも貢献しうる内容を見せている。対象とする地域と問題の重要性、広い視野にもとづいたスケールの大きな洞察は豊かな将来性を感じさせる。

ただ、あえて苦言を呈すれば、随所に見せている言説分析的手法は、目下のところレトリックの域を出ず、成功しているとは言い難い。手堅さと危うさが同居していると言えようか。また、錯綜した現実を引きずられてか、議論のほうも幾らか錯綜している部分が見られ、論旨の明晰さを欠ききらいが無いではなかった。とはいえ、そうした知的冒険と荒削りは、論者の潜在能力の高さを感じさせるものでもあり、今後の研究活動のなかで洗練されていくことを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2001年11月15日に調査委員3名が、論文とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。